

媒介装置としての儀礼

——文化への引入と文化からの脱出——

現代教学研究室

はじめに

宗教を成立させるためには、信仰と儀礼の二つは必要不可欠である。あのデュルケムの有名な宗教の定義「宗教とは、聖物、換言すれば分離され禁忌された事物と関連する信念と行事との連带的な関係である」——でも指摘されているように、信仰（信念）と儀礼（行事）とは、互いに連帯しあいながら一つの宗教を維持させているのである。

この二つの必要条件の内、信仰が宗教の主観的・内面的側面であるとすれば、儀礼はそうした信仰の行為的表現として客観的・外面的側面を担っていると考えることができ。すなわち、それぞれの宗教の信仰のあり方は、儀礼として表現されることによって具体化するのである。そしてこれを逆に言うならば、我々は儀礼を見ることに

よって、その宗教を信仰する人々の心性を知ることができるのである。

そこで現代教学研究室では、具体的な儀礼として、我が宗の葬儀及び葬後儀礼（四十九日、一周忌）を取り上げ、そこにどのような信仰者の心性が込められているかということについて探ってみたい。

一、儀礼の媒介性

我々は通常、俗なるコスモスすなわち人間が安定してそこに住むことができる意味と秩序で構成されている世界の中で生きている。そしてこの俗なるコスモスとは、換言すれば、我々の文化と置き換えても、またその原初形態である習俗と置き換えてもいだろう。我々の日常生活は、通常、綻びのない充足したコスモスのなかで維

持されているのである。

しかし、ひとたび、その俗なるコスモスが崩れ、すなわち、これまで安定的に身を委ねていた意味と秩序が崩壊し、それとは異質の得体の知れないカオスを垣間みる時、人間は潜在的な不安、恐怖を抱く。

その最も端的な例として考えられるのが、人の死であろう。共同体のある役割を担っていた者が亡くなる。例えば、一家の大黒柱を失うということは、現実的には経済的な秩序の崩壊であり、子供という立場から捉えれば、自分の親が欠落したということによって、これまでの自分の子供としての意味が喪失したことになる。一人の人間の死によって、それまで保たれていたアイデンティティが崩壊の危機に晒されるのである。

さらにそうした謂わば現実の生のレベルでの不安のほかに、綻びたコスモスの網の目から侵入してきたカオスは、我々にももしかしたら自分もそのなかに引きずり込まれるのではないかという、より根源的な不安、恐怖をも抱かせるのである。共に同じ世界の中で、時間を過ごし、笑い、怒り、悲しみ、喜んでいたものが、その世界からいなくなり、どこかへいってしまふ。それまでは意識していなかった異世界の存在が否応なく眼前に迫って

くるのである。縁者の死によって我々はかつて経験したことのない不気味な、しかしある意味でチラと垣間みたくもなるような異世界と対峙する。我々は、その時、それまで自分が安住していた俗なるコスモスの世界（文化）と異世界との狭間に置かれることになるのである。

それでは、俗なるコスモスの世界（文化）と異世界との狭間に置かれ、不安定な状態になっている者が再び元の安定した日常に戻るにはどうしたらいいか。

それには二重の手続きが必要である。一つは、綻んだ従来の意味と秩序を再構築することによって、再び自らのアイデンティティを取り戻し、俗なるコスモスの世界（文化）に復帰するということであり、もう一つは、異世界への通路を開き、それまで所屬していた世界から追い出された者（＝死者）を彼が次に所屬すべき世界へと送り出すということである。またこの場合、前者は「文化」と再び同一化し、「文化」の中へ引入されるといふベクトルをもつものであり、後者は「文化」から分離し、「文化」の外へ脱出するというベクトルをもつ。

儀礼とは、俗なるコスモスの世界と異世界の狭間にある者をどちらかの世界へ合一させるための媒介として捉えることができるのではないだろうか。そしてその媒介

性には二種の意味があり、それは異世界を消失させて生者を日常世界へ帰還させるための媒介性と死者を日常世界から完全に分離させ、異世界へ統合させるための媒介性である。

現代教学研究室では、作業仮説的にこの二重の媒介性をもつ儀礼の内、前者の日常世界へ帰還させるといふ儀礼を「俗化儀礼」と呼び、後者の日常世界から分離し、異世界へ統合させるといふ儀礼を「聖化儀礼」と呼びたい。

二、儀礼としての「葬儀・葬後儀礼」の意義

人は何のために葬儀及び葬後儀礼を行うのだろうか。あるいは、その一連の儀礼に何を求めているのであろうか。

「葬儀・葬後儀礼」とは、「死」あるいは「死者」を介して初めて成立する儀礼である。しかし、だからといってそれが「死者」のためのみに行われているかといえ、必ずしもそうではない。「葬儀・葬後儀礼」とは、「死者」のための儀礼であると同時に、「生者」のための儀礼でもある。謂わば、「葬儀・葬後儀礼」には、二種の主体が存在するのである。

それでは、この二種の主体をもつ「葬儀・葬後儀礼」には、どのような意義・目的があるのだろうか。

それには大きく分けて二つの要因があるように思われる。一つは

A、「死」という異常な事態から脱却し、生者が再び日常性を回復するためという要因であり、もう一つは、

B、「死者」に対する供養のためという要因である。

そしてさらにそれぞれの要因は機能的に次の五つの側面を含み、それらについて先述の儀礼の二種の媒介性を当てはめるならば次のようになる。

A、生者の日常性の回復

①死者を異世界（仏の世界）へ送り出す …… 宗教的側面
・ 聖化儀礼

②生者同士の死の了解、死んだことの公言 …… 社会的側面
・ 俗化儀礼

③遺された者の悲しみの克服 …… 心理的側面・俗化儀礼

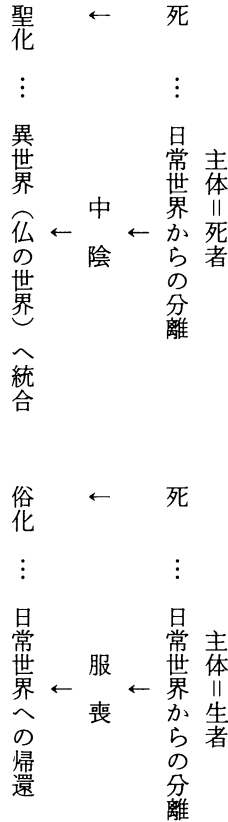
B、供養

④死者の魂を鎮める …… 呪述的側面・聖化儀礼

⑤死者への追慕 …… 心理的側面・俗化儀礼

儀礼としての「葬儀・葬後儀礼」の特異性とは、その中に俗化儀礼としての意味と聖化儀礼としての意味の両方が含まれているという事である。そしてそれは「葬儀

・葬後儀礼」の主体を生者におくか死者におくかによって異なるのである。その過程を主体別に見れば、次のようになる。



三、調査の概要

それでは、実際に「葬儀・葬後儀礼」に参列している人は、儀礼に何を求めて参列しているのだろうか。現代教学研究室では、それについて実証的に検証するため質問紙法による調査を試みた。

詳細な調査の概要は別論に譲るとして、ここでは大まかな概略だけを記すことにする。

まず、本調査の目的は次の二つである。

①葬儀・四十九日・一周忌に参列する目的について明らかにする。

②参列者が儀礼の執行者である僧侶に何を期待しているのかを明らかにする。

本調査で設定された質問項目は、次の通りであり、またそれぞれの項目は矢印で結ばれたような機能的側面・媒介性に対応している。

〈参列する気持ち〉

A：故人をほとけ様の世界に送るため↓宗教的・聖化儀

礼

B：故人が亡くなったことを皆に知ってもらうため

↓社会的・俗化儀礼

C：故人が亡くなったことによる悲しみを癒すため

↓心理的・俗化儀礼

D：故人が安らかに眠れるように、その霊(魂)を慰めるため

↓呪術的・聖化儀礼

E：故人を偲び、故人との思い出に浸るため↓心理的・

俗化儀礼

F：生前、故人から受けた恩に感謝するため

G：生前、お世話になった人に、故人に代わってお礼を

言うため

H：故人に最後の別れを告げるため

〈僧侶に対する期待〉

I：故人に引導を渡してほとけ様の世界に送ってほしい

↓宗教的・聖化儀礼

J：故人の生前の功績や人柄を参列者に知らせてほしい

↓社会的・俗化儀礼

K：遺された者を慰め、悲しみを癒してほしい

↓心理的・俗化儀礼

L：故人が安らかに眠れるように、その霊(魂)を慰め

てほしい ↓呪術的・聖化儀礼

M：故人とのつながりや思い出を話してほしい

↓心理的・俗化儀礼

N：仏教の教えについて話してほしい

O：お経さえ唱えてくれればよい

P：何も期待しない

これらの項目について、葬儀・四十九日・一周忌の法要終了後、参列者に回答してもらった。尚、回答の仕方は、それぞれの項目毎に五段階評価(五点||まさにそうである・四点||そうである・三点||どちらともいえない・二年||そうではない・一点||全然そうとは思わない)で当てはまるところに○を付けてもらったのである。

集計は、それぞれの項目の平均得点を算出し、さらにそれを二つの分析の視点から比較した。二つの分析の視点とは、一つは死者との関係性の近さであり、これは死者との同居経験の有無によって区別されている。すなわち死者と同居経験があるという人は、親・子供・配偶者など関係性が近いグループと捉え、同居経験がないとい

う場合は、友人・近隣者・仕事上の関係など前者に比べて死者との関係性が遠いグループと考えたのである。

もう一つの分析の視点とは、時間経過による比較である。これは、葬儀・四十九日・一周忌という死からの経過時間の違いによる比較である。

この二つの分析の視点を設定したのは、それによって結果に違いが生ずるのではないかと予想されるからである。すなわち、死者との関係性の遠近という視点については、まず、関係性の近いグループの方は関係性の遠いグループに比べて「葬儀・葬後儀礼」に対する期待が一般的に高いと考えられる。なぜならば、かつて同居していた、あるいは現在同居している者の死は、同居経験がない人よりも、大きな衝撃を与え、またコスモスの綻びの程度も高いと思われ、儀礼がそうした不安定な状態から再び安定を取り戻すための媒介であるならば、これに対する期待は死者との関係性が近い者の方が大きいと予測できるのである。さらに機能的な面から見れば、関係性の近いグループは、心理的・宗教的機能、すなわち自分達の悲しみを癒し、かつ十全に死者をあの世におくるということに対する期待が大きく、関係性の遠いグループは、社会的・呪術的機能、すなわち生者同士で死を了解

し、また死者の魂が安寧に鎮まっていることに対する期待が強いのではないかと予測される。

死からの経過時間による比較では、まず全般的には、死からの経過時間が短い方が、衝撃、混乱、戸惑いの程度が大きく、従って儀礼に対する期待も大きいと考えられる。また機能的には、時間経過に従って宗教的・社会的機能に対する期待から心理的機能へ、さらには呪術的機能に対する期待へと移行していくのではないかと思われる。死後間もない葬儀の段階では、とにかく死者を異世界に送りだし、また死を公言することが主要な目的であり、次いで衝撃・混乱・戸惑いがある程度治まった段階では、しみじみと死の悲しみを癒し、さらに時間が経過すると、日常に戻りつつある自分達の秩序を再び混乱させないために死者の魂が安らかなることを願うということが予想されるのである。

このような予測の下、前記の二つの視点から結果を分類し、平均得点の高さによってランキングをつけた。それは次の通りである。

① 四、調査の結果
 ① 参列する目的・項目別順位・故人との関係性の遠近による比較

G 1 : 同居経験あり

G 2 : 同居経験なし

<葬儀>

G 1	A	H	D	B	E	F	G	C
	4. 800	4. 750	4. 750	4. 150	4. 100	3. 900	3. 800	3. 700
G 2	D	H	F	A	E	B	C	G
	4. 458	4. 417	4. 250	4. 000	3. 875	3. 667	3. 542	3. 250

<49日>

G 1	D	A	F	E	H	C	B	G
	4. 958	4. 792	4. 375	4. 292	4. 167	3. 833	3. 708	3. 583
G 2	D	A	E	F	H	B	G	C
	4. 650	4. 200	4. 100	3. 750	3. 650	3. 250	3. 150	2. 950

<一周忌>

G 1	D	E	F	A	G	B	C	H
	4. 710	4. 516	4. 419	4. 355	4. 226	3. 968	3. 710	3. 613
G 2	D	A	F	E	B	C	G	H
	4. 619	4. 452	4. 452	4. 286	4. 167	4. 095	3. 881	3. 738

まず、参列する目的について死者との関係性の違いという視点から見てみよう。

G1（同居経験あり）とG2（同居経験なし）で大きく異なる結果となった項目を挙げれば、葬儀の場合、G1で、最も高得点を得たのはA項目（「故人をほとけ様の世界へ送るため」）であるのに対して、G2（同居経験なし）では、第四位となっている。またG2の第一位は、D項目（「故人が安らかに眠れるように、その霊を慰めるため」）であり、この項目はG1では第三位となっている。さらにF項目（「生前、故人から受けた恩に感謝するため」）について見ると、G1では第六位であるのに対してG2では第三位となっている。

四十九日、一周忌の場合は、両グループの間に大きな違いは見られないが、一周忌のA項目とE項目（「故人を偲び、故人との思い出に浸るため」）の順位が逆転しているのが認められる。

また全体的に見れば、どのグループともB項目（「故人が亡くなったことを皆に知ってもらうため」）が中位から下位に、C項目（「故人が亡くなったことによる悲しみを癒すため」）とG項目（「生前、お世話になった人に故人に代わってお礼を言うため」）が下位にランクさ

れていることがわかる。

これらの結果から言えることは、死者との関係性の遠近によって、参列する目的にさほど大きな違いはないということである。両グループとも、先述した儀礼の二種の媒介性から言えば、死者を日常世界から分離して異世界へ統合させるという「聖化儀礼」としての葬儀・葬後儀礼を志向しているのであり、遺された者が再び日常世界へ帰還するという「俗化儀礼」としてのそれに対する期待は前者に比べて低いと言える。また、機能的側面から言っても、両グループとも、「聖化儀礼」に対応した宗教的・呪術的側面に期待を寄せているのであり、「俗化儀礼」に対応した心理的・社会的側面への期待は、相対的に低いと言える。

このように両グループの間には、葬儀・葬後儀礼に参列する目的には大きな相違は認められないが、儀礼に対する期待の強さという点では、違いがあると思われる。葬儀・四十九日について両グループのそれぞれの項目の得点を比較すると、どの順位の項目も、G1すなわち死者との関係が近いグループの方が、一貫して高い得点となっているのである。このことは、死者との関係性の近い人達は、遠い人達よりも、葬儀・葬後儀礼の諸機能に

<葬儀>

G 1	L	I	N	K	M	J	O	P
	4. 850	4. 450	3. 850	3. 750	3. 400	2. 800	1. 950	1. 700
G 2	L	I	K	N	M	J	O	P
	4. 542	4. 083	3. 958	3. 542	3. 375	3. 042	1. 917	1. 542

<49日>

G 1	L	I	N	M	K	J	O	P
	4. 917	4. 708	4. 208	3. 582	3. 500	3. 000	1. 708	1. 542
G 2	L	I	K	N	M	J	O	P
	4. 650	4. 350	3. 900	3. 450	3. 250	3. 100	1. 900	1. 550

<一周忌>

G 1	L	I	N	M	K	J	O	P
	4. 710	4. 452	4. 258	4. 097	3. 903	3. 581	2. 677	1. 903
G 2	L	I	K	N	M	J	O	P
	4. 643	4. 286	4. 286	4. 143	4. 024	3. 690	2. 357	1. 952

対して全般的に強い期待感をもっているということを示している。ただ、一周忌になると、両グループの間には、得点の差がなくなってしまうことも指摘しておかなければならない。

②僧侶に対する期待・項目別順位・故人との関係の遠近による比較
次に儀礼の執行者である僧侶への期待について見てみよう。その結果は次の通りである。

媒介装置としての儀礼

この結果は前述した参列する目的と同じ傾向を示している。両グループの間には殆ど違いは認められず、聖化儀礼、そしてそれに対応する宗教的・呪術的機能を司る僧侶への期待が、俗化儀礼に対応する心理的・社会的機能を司る僧侶への期待よりも高くなっている。

またO項目（「お経さえ唱えてくれればよい」）、P項目（「何も期待しない」）は常に下位にランクされているという事実は、我々にとって救いであり、かつ肝に銘じなければならぬことであろう。

両グループ間の僧侶への期待の強さの違いについては、関係性の近いグループの方が若干、全体的に高い得点を得ているという傾向はあるが、参列する目的の場合ほど大きく異なっていない。

③参列する目的・項目別順位・時間経過による比較

次に参列する目的について時間経過という視点から比較してみよう。その結果は表の通りである。

時間経過によって影響を受けているのは、H項目（故人に最後の別れを告げるため）だけで、あとは時間経過に関係なく、ほぼ同様な傾向を示している。H項目が時間の経過とともに順位を下げていくのは、その項

葬儀	D	H	A	F	E	B	C	G
	4.590	4.500	4.363	4.068	3.977	3.886	3.613	3.500
49日	D	A	E	F	H	B	C	G
	4.840	4.522	4.204	4.181	3.931	3.500	3.431	3.386
一周忌	D	F	A	E	B	G	C	H
	4.662	4.472	4.405	4.391	4.094	4.040	3.945	3.662

目の内容からして当然の事と思われるが、あとは、D項目・A項目・F項目・E項目が上位を占め、B項目・C項目・G項目が一貫して下位を占めている。ここでも俗化儀礼に対する聖化儀礼の優位性、ならびに心理・社会的側面に対する呪術・宗教的側面の優位性が、時間経過に関係なく認められるのである。

④ 僧侶に対する期待・項目別順位・時間経過による比較僧侶に対する期待は、時間経過を影響の全く受けていないと思われる。ここでも一貫して聖化儀礼、及び呪術・宗教的側面の優位性が示されているのである。

またここで一つ指摘しておきたいのは、J項目（「故人の生前の功績や人柄を参列者に知らせてほしい」）、M項目（「故人とのつながりや思い出を話してほしい」）よりもN項目（「仏教の教えについて話してほしい」）の方が常に上位にランクされていることである。このことは、葬儀・葬後儀礼における嘆徳文のあり方、あるいは法話のあり方に示唆を与えていると思われる。

五、まとめ

調査の結果は、必ずしも我々の仮説と一致するもので

葬 儀	L	I	K	N	M	J	O	P
	4.681	4.250	3.863	3.681	3.386	2.931	1.931	1.613
49日	L	I	N	K	M	J	O	P
	4.795	4.545	4.068	3.477	3.431	3.045	1.795	1.545
一周忌	L	I	N	K	M	J	O	P
	4.675	4.324	4.202	4.175	3.959	3.621	2.472	1.918

はなかった。関係性の遠近・時間経過という要因には殆ど影響されずに、「葬儀・葬後儀礼」は一貫して死者を異世界へ送る、あるいは死者の魂を鎮めるといふ聖化儀礼、及びそれに対応する呪術・宗教的側面の優位性が実証されたのである。悲しみの克服、または死の公言という心理的・社会的機能に対する期待は常に低く、参列者は「葬儀・葬後儀礼」とは別の所でそれらの課題を解決していると思われる。換言すれば、「葬儀・葬後儀礼」の主体はあくまでも「死者」であり、その主体である死者を文化の外へ送り出し、かつその死者の魂が荒ぶることなく、安寧に保たれることを願い、また儀礼の執行者である僧侶にも、そのための役割を果たすことを期待しているのである。生者を主体とした文化への引入のための媒介性としての役割はきわめて少ないと言える。

ただ今回の調査で我々が扱ったのは葬儀・四十九日・一周忌という死からの時間が短い段階での儀礼であった。従って、もっと長い時間を経過した葬後儀礼について同じ調査を試みれば、あるいは違う結果が得られるかも知れない。

しかし、この調査結果が、凶らずも死者供養と鎮魂を中心とした先祖崇拜という日本人の宗教的心性の特徴を

支持するものとなったことは興味深い。儀礼を司る我々にとつて、そのあり方を問う際の一つの指針にはなるう。